

復活節特別集会

永遠の生命を生きる（二）

2016年4月17日（東京 新宿）

奥田 昌道

我々の生命とは何なのか 永遠の契約 愛の永遠性 恐るべき者 明日のことを思い煩うな 永遠の生命 イエスとニコデモ 存在そのものが罪 永遠の命を得るため 天から来られる方 幼児のように 御子の権威 イエスについての証し イエスは命のパン 終わりの日に甦らせる命を与えるのは「霊」 イエスは良い羊飼い イエスは復活と命 イエスの祈り 信仰によって義とされて アダムとキリスト 罪に死に、キリストに生きる 信仰に生きる 本国は天にあり 愛の讃歌 復活の体 天への土産 祈り

我々の生命とは何なのか

熊本で長い間、地震が続いて、大変な状況が報道されています。本当に心痛みますが、我々としては、そういう自然の猛威といえますか、動きに対してどうすることもできないという、そこに加えて、大雨が降るということで、本当に熊本、九州の方々にはお気の毒で仕方がありません。

ただ、我々の住んでいるこの地球の生活というのはそういうものなんです。人間はすぐ思いついて、自分たちで自然をどのようにでもコントロールできるといふふうには、つい自惚れる面がないとはいえない。例えば、月へ行けるとか、火星の近くまで行つてみるとか、そういった宇宙の向こうまで自分たちは行けるんだという、そういう壮大な計画を一方で持つておられますけれども、いざ九州のあのような災害が起こった場合に、我々としたらどうしようもない。それを黙って受け入れるしかないという、そういうこともどかしさを感じます。と同時に、やはり人間として謙虚さという、人間はそういういった大自然の活動に対してはまことに無力であるという、そういうことを思わざるをえません。

それと合わせて、非常に大事なことですけれども、我々の生命とは何なのか。自然の生命がああいう災害によつて奪われたら、それで何もかもがお終いなのか。それとも、

「この目に見える自然的生命がたとえ奪われても、なお奪われないものがある。あれでもう絶望ではない。なおこの死というものを突破して、本当に永遠に生き続ける本当の生命の世界があるんだ」

ということをキリストはもたらしてくださった。そのことを私は強調せざるを得ない。それは単に我々人間の側の願望ではなくて、「食べる」とか、「飲む」とか、「血肉とする」とか、「二つになる」とか、そういう具体的な表現で仰いました。

「本当にそうなんだよ。私を食べる者は、私と本当に一つになれば、あなたは永遠



の生命者だよ。自然的な生命がたとえ滅びても、それで滅びないものを私はあなた方に差し上げたい」

と言つて、わざわざ天の栄光を捨てて、地上に降りてくださつて、そして、我々と同じような生活をして、生きる悩みやいろんな苦しみも味わいながら、しかしそれを突き抜けて、

「本当の生命を私は差し上げたい」

と言つて、ご自分はあの十字架を自ら背負つてくださったという、そういうお方なんです、キリストという方は。

キリストというお方は今も生きておられます。我々が祈れば、目には見えないけれども、ここへ来て働いてくださる。我々一人びとりの胸に、ハートに、霊に語りかけ働きかけてくださるといふ、生きたお方です。正に永遠の生命者というのはキリストご自身なんです。そのキリストと同質の生命を我々がいただきますと、

「たとえ外なる人は破るれども、内なる人はいよいよ日毎ひごとに新たなりあら」

と、コリント後書4章の終わりのところに出てきます。

「たとえ外なる人は破るれども、内なる人はいよいよ新たなり。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くのである」

と、これは本当に真実なんです。目に見えるところがどうなろうと、それに左右されない本ものの生命というものをキリストは顕してくださった。今も我々に顕し続け、

「あなた方一人びとりはその生命いのちに生きるんだよ」

という励ましをくださる。これを受けとらなかつたら。ただ知識として

「永遠の生命とはなんぞや、そこに到る道は何だ」

ということをいくら理屈で覚えたつて何もなりません。

自分自身がその世界の中に入る。ということは、

「キリストと一つになる。キリストさまに一つになつていただく」

それがもう、究極といえますか、私がお話したい核心なんです。

だいたい、我々自身の中に「永遠の生命いのち」なんてありません。我々は人間としては、自分の生命が無くなつても、次の世代にバトンタッチしていきます。それが生殖という、子どもさんを生むという営みです。それがずっと続いている。どこかで途切れたら、もう今は地球上に人間はいないわけです。それがずっと続いている。しかも、皆さんもご先祖から生まれて今の自分があり——途絶える方もいらつしやるけれども——結婚なさり、あるいは子どもさんをお持ちになるといふ形でまた自分の生命を次の世代へとバトンタッチしていく。自然界がみなそうです。自然界の雄の役割は何かというと、雌を通して生命いのちを次の世代へ受け継がせていくというのが最大の役割のようです。我々も自然の一部としてはそのようにしてみんな次の世代へと自分の生命をバトンタッチしていく。

しかし、大事なことを申し上げますが、それは自分と同じ内容、同質のものを受け継が



せるけれども、それ以上のものを受け継がせることはできない。つまり、「永遠の生命^{いのち}」というものは、生まれながらの人間にはありません。「自分は永遠の生命を持つている」と言える人は一人もいないはずで、自分が持つていてだけのものでしか次の世代へはバトンタッチできない。これは単純なことですね。自分の中から永遠の生命をプロデュースできるか、生み出すことができるか。誰もできません。これも単純なことです。

ところが、やはり人間というのは、何か永遠なるもの、いつまでも存続していくものに対する憧れ^{あこが}というのがある。ロマンチックな憧れかもしれないけれども、たとえば空を見れば、

「ああ、虹が出ている。素晴らしいなあ」

なんて、非常に感動いたします。これは人間の自然な姿だと思えます。人間は有限な存在でありながら、やはり何か有限なるものを超えた何かに対する憧れ、願望、そういうものがあると思うんです。そういったものを、単なる思想ではなくて、神さまの御言集^{みことば}である聖書の中にどのように扱われているのか、それを皆さんと一緒にたどっていきたいと思います。

永遠の契約

「永遠」という言葉は、いろんな意味があると思えます。いつまでも長続きする、いつまでも存続するという意味があります。それから、時間が長かろうが短かろうが、たとえ瞬間なものであっても、何か永遠なるものというものはあるはずで、つまり、時間とか長さに影響されない、質的に輝いて滅びないもの。そういうようなものと、それから、いつまでも長続きするもの、そういう両方を持つていると思う。結婚式で、「永遠の愛を二人は誓います」とかいう、その時の「永遠の愛」とは何なのでしょうね。時間によつて消え去らない、いつまでも存続するもの、という意味あいを持つていると思えます。

「愛は永遠である」

とか言います。聖書の中から捜してみますと、まずノアの方舟^{はこぶね}の有名な話があります。あそここのところで虹が出てくる。創世記第9章8節から17節です。人類が罪を犯してしようがないというので、神さまは一斉^{いっせい}にここで審判を下そうとされた。洪水がやがて襲つてくると、山の頂きにまでその水が達する。ノアに対して、

「あなたたちは生き延びるように」

と、大きな方舟を造ることを命じられた。お天気が好いのにノアは山の上で一生懸命に方舟を造つて、みなから馬鹿にされるわけです。洪水が40日間、地上を覆いました。それからだんだんと水が引いていく。そこで、9章にこんなお話が出てきます。

「神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ち

よ。²地のすべての獣と空のすべての鳥は、地を這^はうすべてのものと海のすべ



ての魚と共に、あなたたちの前に恐れおののき、あなたたちの手にゆだねられる。³動いている命あるものは、すべてあなたたちの食糧とするがよい。わたしはこれらすべてのものを、青草と同じようにあなたたちに与える。⁴ただし、肉は命である血を含んだまま食べてはならない。

⁵また、あなたたちの命である血が流された場合、わたしは賠償を要求する。いかなる獣からも要求する。人間どうしの血については、人間から人間の命を賠償として要求する。⁶人の血を流す者は人によって自分の血を流される。人は神にかたどって造られたからだ。⁷あなたたちは産めよ、増えよ。地に群がり、地に増えよ。」

⁸神はノアと彼の息子たちに言われた。

「⁹わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。¹⁰あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。¹¹わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがごとごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」

¹²更に神は言われた。

「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、^よ代々とこしえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。

^よ代々とこしえに」という、ここに「永遠」というような言葉が出てくる。

¹³すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。¹⁴わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、¹⁵わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。¹⁶雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」

ここに「永遠の契約」という言葉が出てくる。

¹⁷神はノアに言われた。

「これが、わたしと地上のすべて肉なるものとの間に立てた契約のしるしである。」(創世記9・1～17)

だから、虹が現れますと、その虹は神さまから見たときに、地上の生き物たちとの間で立てた契約のしるしで、そしてこれは永遠の契約であると。だから、決してあなたたちが罪深いからといって、洪水を起こして滅ぼすなんていうことはしないというお約束をなさつ



た話がここに出てくるわけです。「永遠の契約」という、ここに「永遠」という言葉が一箇所出てきます。

それから、もう一箇所は「伝道の書」(新共同訳では「コヘレトの言葉」)の3章10節に、

「¹⁰わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。¹¹神はすべてを時宜^{じぎ}にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業^{わざ}を始めから終りまで見極めることは許されていない。」
(コヘレト3・10～11)

「神はすべてを時^{とき}にかなうようにお造りになり、また、永遠を思う心を人に与えられる」という。だから、人の心に永遠を慕い求めるといふ気持ちも神さまはお与えになったということが、そこに出てくるわけです。

愛の永遠性

それから、新約聖書の方では、「コリントの信徒への手紙二」の13章、「愛の讃歌」と呼ばれている所に、愛の永遠性ということがうたわれています。これはキリスト教式の結婚式では、必ず牧師さんがそこを引かれる箇所です。

「⁴愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。⁵礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。⁶不義を喜ばず、真実を喜ぶ。⁷すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。⁸愛は決して滅びない。……

愛はいつまでも絶えることがない。愛の永遠性ですね。それから、預言とか知識とかはみな廃^{すた}れていくけれども、そしてまた、今、自分たちは神さまのことが十分にはわかっていないけれども、神さまの側では我々のことをすべてご存知であるということが出てきまして、

¹²わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。¹³それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中でも大きいなるものは、愛である。」(コリント二13・1～13)

「信仰と希望と愛は限りなく残らん」

という。つまり、永遠だと。愛の永遠性ということ^{うた}を謳^{うた}っているのがこの箇所なんです。

そして、さきほども申しましたように、我々人間の方には、自然的な人間には、その永遠という生命^{いのち}はありません。自分の生命を後世に伝えても、それは自然的な生命は伝えることができるけれども、死を乗り越えて、肉体が減びてもなお永遠に生き続けるような、そういった霊的な存在。これは人間からは出てこない。これは神さまが我々にくださるプ



プレゼントです。そのプレゼントをキリストが我々に差し出してくださっているんですけども、人間は我が強いですから、

「要りません!」

と言って断っている。なぜ、こんな素晴らしいプレゼントを

「はい、ありがとうございます!」

と、単純に受けとれないのか不思議でならない。だいたいみんな断るんですね。私は不思議でしょうがない。皆さんはそうでないから、ここへおいでになっているのだと思います。これは自分の中にはないんですから、頂くしかない。それを、

「これだけのことをやったら、あげる」

なんて、どこにも書いてない。「ただ信じなさい」と書いてある。

「ただ信じて受けとるならば、あなたのものになりますよ」

と言われる。ただで差し出されるのを皆さんは嫌がるんです。「三百万円持つてこい」と言われると、一生懸命に持つてくる。そういうなにか人間というのは妙な癖があるなと私は思う。私なんかは、

「ただで上げるよ」

と言われたら、

「はい、ありがとうございます」

と、喜んでいただきます。

恐るべき者

そんなことで、今日は御言みことばを順番にたどつていこうと思つています。皆さんの所にプリントを用意していただいていると思いますので、それによりながら、聖書ではいったい「永遠の生命」というものをどんなふうに取り扱っているのだろうか。我々の自然的な生命と、それから永遠の生命、それはどういう関わりがあるのだろうか。そのあたりを御言を中心にしてたどつていこうと思います。皆さんのお手もとにあるのは新共同訳のものです。

まず、ルカによる福音書の12章4節から7節（「恐るべき者」）。

「4 「友人であるあなたがたに言っておく。」

キリストは弟子たちのことを「友人」と、友だちだと言つてくださっている。

体からだを殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。

まさに自然災害というのは身体を殺します。東北の東日本大震災がそうでした。そして今回の熊本の大地震もそうです。しかも、熊本の方はずっと長続きしてますから、これは非常にお気の毒だと私は思います。震災のあとに大雨でしょ。これは本当に残酷な感じがいたしますが、しかしながらこの、

「体を殺しても、その後、それ以上何もできない者ども」



とは生き物だったら、サタン、悪霊ということになりましようし、また、そういったものにとつ憑つかれて犯罪を犯す——いろいろありますね、通り魔事件だとか、なにか理由なく人を殺傷するというようなことがよく起こってますね、銃を乱射するとか——そんなことを想像いたします。これは結局、身体を殺すことはできても、それ以上のことは何もできない。自然力であろうと、人力であろうと、それは身体を殺すことはできても、その後それ以上何もできない。そんなものは恐れることはないと言う。

⁵だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持つている方だ。そうだ。言っておくが、この方を恐れなさい。⁶五羽の雀がニアサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない。⁷それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。』(ルカ12・4〜7)

明日のことを思い煩わづらうな

これと似たような話が、あのマタイ伝で言いますならば、6章25節から34節までの、²⁵「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。²⁶空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養つてくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。²⁷あなたがたのうちだが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。²⁸なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。²⁹しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。³⁰今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装つてくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。³¹だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言つて、思ひ悩むな。³²それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存知である。³³何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。³⁴だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。』(マタイ6・25〜34)

「明日のことを思い煩わづらうな」というところですね。何を食べようか、何を飲もうかと、そ



ういう命のこと、糧のことで思い煩うなど。何を着ようかと衣のことで思い煩うな。空の鳥を見てごらん。野の花を見てごらん。何も思い煩わないのに、ちゃんと神さまは必要なものを用意なさっているではないか。ましてや、あなた方のことを、そういった野の花や空の鳥よりもはるかに大切なものだと神さまは思っているにいらつしやる。だから、まず神さまの御意を求めていきなさい。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられると。

「お腹がいっぱいになればその次に神さまのことを考えよう、ではないよ。順序は逆だ。まず神さまのことを、御意を求め、それに自分を捧げていけば、必要なものはすべて与えられる」

という、これがキリストの約束だった。だから、その約束と、ここに出てますルカの福音書と共通のものがあります。

「あなた方は空の鳥や野の花よりはるかに大事なものだというふうに、神さまはお考えになつていらつしやる。だから、まず神さまは何を願っていただくつていいのか、どうあることが一番神さまの御意に叶うのか、そちらを第一にしたなら、必要なものはすべて添えて与えられるよ」

と。そういうことです。

永遠の生命

それから今度は、「永遠の生命」が一番出てきますのは、ヨハネの福音書ですので、それをたどつていきます。まず、1章1節から5節。

「1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によつて成つた。成つたもので、言によらずに成つたものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」（ヨハネ1：1-5）

この、

「初めに言ありき」

というのが有名なところで、多くの方がこれをご存知です。しかし、この「言」というのはいったい何であろうか。明治の頃の訳では、

「初めに霊言いづる」

という訳がついていたようです。霊の言葉。単に人間が発する言語ではなくて、霊なる言葉、霊言です。それから、「道」という字を当てていたものもあつたそうです。

「初めに道ありき」

と訳された。この「言」というのはなかなか翻訳が難しいようですが、要するにこれは霊なるキリストなんです。昔、地上においてイエスという姿で現れてくる前の、天上におい



てキリストがいらっしゃったその在り方、これが「言」という表現で表されているだけの
はなしです。だから、

「初めに霊なるキリストが神の御座みくらにおられた」

と、そう考えていただいていた方がいいわけです。その神の御座におられた霊なるキリスト、霊的
人格キリスト、れいかく霊格者キリスト。そういった、要するに、霊の次元というのは我々は想像
できない。我々は肉体のことはわかります。手で触れる、いろんなもので確かめられる、
たとえ目に見えない存在でも顕微鏡で見たら見えるでしょうし、いろんなことでわかるけ
れども、霊という次元になりますと、これはお手上げです。「霊を見分ける」とか、そんな
低次元のはなしではない。本当に高次元の、神さまの至高なる世界、そこにいらっしゃる
神と同格で存在しておられた霊的人格キリスト——「人格」というともう人間的ですから
——霊格キリスト、霊的な次元のキリスト。そのお方が我々の想像もつかない別の次元——
地上の三次元ではない、四次元か五次元か知りませんが——そういった天界、天の次元——
そこに神さまとご一緒におられた霊的人格であったキリストがやがて肉体をまとして地上
におりて来られたというのがクリスマスですよ。そのことをここで言っているわけです。
そういう霊なるキリスト。これは神さまとご一緒であった。「神さま」と言ったって、こ
れは誰もわからない。また、

「神を見た者は一人もない」

とあります。ただ、見た者は誰もいないけれども、

「このイエスというお方だけが神さまを顕した」

と、こう書いてある。その出だしのところ、ここに

「初めに霊なるキリストがいらっしゃった。この霊なるキリストは神さまとご

一緒であった。この霊なるキリストは神ご自身、神と同質であった。この霊

なるキリストは神さまと初めに共にあった」

と。繰り返しですね。

「万物はこの言によって成った」

という。

「光あれと仰れば、光があった」

と創世記の初めに出てくる。そういうふう、神の言、キリストが発せられる言を通して、
万物は創られたというのが創世記なんです。

自然科学の世界でしたら、37億年前になにか地球のようなものが出来上がったとか、い
ろいろ書いてますね。そういった自然科学的な生成過程と、創世記で言っている、聖書で言っ
ているこの天地の創造とは全く別です。それをゴツチャにしたらややこしいことになりま
す。

だから、神さまの眼から見たときの地球だとか、我々の人間存在は何かというのは、聖書



の啓示によって我々は知る。でも、自然科学的な生成過程は考古学者に任せておく。37億年と言おうと、38億年と言おうと、私にはどうでもいい。だいたい、我々は二千年前のキリストだって遠いと思っっているんでしょ。それが37億年、38億年なんてどうでもいいじゃないのと、そんなふうと思う。我々は本当に霊なるキリスト、そのお方、これと繋がっていききたいというわけです。

「この霊なるキリストのうちには命があった。この命は人を照らす光であった」

という。

「我は世の光なり」

と、またヨハネ伝の先の方でも言っておられます。

「私と一緒に歩く者は道に迷うことがない。光のあるうちに、光を信じなさい」

ということも言っておられます。そういうふうには、キリストは永遠の生命をお持ちだし、これは人間を照らす光でもあられた。世界は暗黒です。でも、光は輝いている。

「暗黒は光を理解しなかった」

と書いてある。

イエスとニコデモ

それから次に、3章の1節から21節 (イエスとニコデモ)、ニコデモとの対話。これは私の大好きなところです。このニコデモとの対話で何が問題になっているか。ニコデモはユダヤの指導者で、ユダヤでは尊敬されている学者です。ニコデモ自身は自分に欠乏感がある。このイエスという方とは自分は全く次元が違うということは勘づいている。けれども、昼間に訪ねて行くことはゆるぎされない。ユダヤの大先生が名もなきイエスのところへ昼間に訪ねて行くなんて、そんなことはとうていゆるぎされない。だから、夜こっそりと訪ねて行って、しかし、敬意を表して、

「あなたは神さまから来られた先生であることはよくわかっております」

と、ちゃんと礼を尽くして挨拶している。

「さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなるしを、だれも行いうことはできないからです。」

本気でそう言ったんだと思います、ニコデモは。ところが、イエスは全く違う角度からニコデモにお答えになった。それでニコデモは、どきまぎして全く收拾がつかなくなったというお話です。

3 イエスは答えて言われた。「はつきり言っておく。人は、新たに生まれなけ



れば、神の国を見ることはできない。」

全く別次元の話を持つてこられた。「人、新たに生まれずば神の国を見ることあたわず」と。

4 ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。」

もう一度、母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」⁵ イエスは
は答えになった。「はつきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれ
なければ、神の国に入ることはできない。⁶ 肉から生まれたものは肉である。

霊から生まれたものは霊である。」（ヨハネ3・11〜16）

これなんです。我々は肉体の誕生はお母さんからいただきました。しかし、そのまま
ずっと成人して死ねば、それで終わりです。それで終わらないで、肉体の生命が終わった
時になお天界の生命、天の次元に迎えられるためには、自分の中に天の次元にふさわしい
ものが来ていなければならぬ。これが天の生命です。この霊の生命は人間がプロデュ
ス（produce作り出す）できない。ニコデモもできない。イエスという方だけがそれを携えて我々
にプレゼントとして差し出そうとして来てくださった。そのことがここで言われている。

「はつきり言うておく。だれでも水と霊とによって

「霊によって」でいい。

霊によって生まれなければ、神の国に——霊の次元に——入ることはできな

い。肉から生まれたものは肉である。

自然的な人間として生まれたものはそのままだと。

霊から生まれたものは霊である。」

と。「では、私は肉なる人間で、そんな霊から生まれるなんて、一体どうしたら可能なん
ですか。それを教えてくださいよ」という話になってくるわけです。

「⁷ 『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚

いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それ

がどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとお

りである。」（ヨハネ3・7〜8）

風はどこから来てどこへ行くのでしょうか。今は気象衛星でちゃんと、フィリッピンの
あたりで台風何号が発生して、それがどういう経路をとっていつごろ日本にやって来るな
んてやっていますけれども、大昔の時代にはそんなことはわかりません。だから一体、風と
いうのはどこで生まれてどこへ行くのかと。しかも、風というのは見えない。風によって
木の葉がゆらゆら揺れている。暴風になれば木が倒れる。そういうことはわかりますけ
ども、風そのものは、人間は捉えどころがない。

「霊から生まれるとはそういうことだ。ニコデモさん、あなたは霊的な誕生とい
うのは何か自分で捉まえたり、味わったりできるように思っているかもしれない
ども、違うんだ」



と。肉体的な誕生は誰でもできる。オギャアと生まれて、青年時代にピークに達して、あとだんだん下り坂になって、ヨボヨボになって、お終いと、これが人間の——放物線で表すならば——ピークに達したらあとはもう下るしかない。この先はどこなんだと。地獄でしようか、あるいは極楽でしようかと。誰もわからない。ただ、このような放物線を描くということだけははつきりしている。

ところが、キリストは天の永遠の次元から降りてきて、この辺で呻吟しんぎんしている我々を救い上げて、そしてまたずっと天の次元へ行く。天から下って来て、ここで苦しんでいる者を拾い上げて、そしてまた天の次元へと昇って行つてくださる（上昇する放物線）。これが永遠の生命の世界です。キリストがもたらしてくださるのがこれなんです。ニコデモさんはこつちの方（下降する放物線）です。その対比をここで仰っている。

「ああそうだ、自分はこれでしかなかった。この赤い、天から来た生命——血が流れているから赤い——これでやがて天に行ける。これが欲しい。欲しいけれども、どのようなしたら貰えるんですか」

と。そういう話になってきます。そのことがここに書いてあります。

「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。9.するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。10.イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことがわからないのか。11.はつきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たり、見たことを証しているのに、

そうです、自分は天の世界からくだって来たのだから、自分は知っていることを語り、見たことを証している。でも、

あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。12.わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。

13.天からくだって来た者、即ち人の子のほかに、天に上った者はだれもいない。

キリストは自分のことを「人の子」という表現で表された。それは天からくだって来た。私以外には誰も天上にのぼった者はいないと。

14.そして、モーセが荒野野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。

これが十字架なんです。イスラエルの民は神さまに背いたために蛇に咬かまれてバタバタと病で休たおれていた。その時に神はモーセにお命じになって、

「青銅の蛇を高く天に上げなさい。それを仰ぎ見た者は癒される。しかし、そんなバカなどと言って相手にしない者はそのままだ」



ということが民数記の21章4節から9節に出てくる。蛇は呪いの象徴なんです。その呪いの象徴である蛇を仰ぎ見た者は癒されていった。「それと同じように今度は、自分も上げられねばならない」と。つまり、十字架は呪いなんです。これはガラテヤ書にあります。

「イエス・キリストは呪われる者となれり」（ガラテヤ3・13）
と。十字架に架けられたということが出てきます。

モーセが荒野野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。¹⁵それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」（ヨハネ3・8〜15）

と。ここに十字架が隠されている。よく、「ヨハネ伝は十字架がない」というようなことを言う人がある。そうではない。ちゃんとここで、

「私は十字架を負って呪われる者となって、そこで人の罪を全部背負う」

ということをはつきりと言っておられるんです。それは、それを受け入れる者のためという。誰のための十字架なんだ、何のための十字架なんだと。キリストは何一つ間違ったことをなさっていません。

存在そのものが罪

そもそも、「罪」とは何か。よく、「罪の贖い」^{あがな}「贖罪」^{しよくざい}と言いますね。一体、「罪」というのは何でしょうか。

「こんな悪いことをしました、あんなことをやりました、人を呪いました、人を怨^{うら}みました」

と、そういう自分の心の姿だとか、あるいは、喧嘩して人を傷つけてしまうということもあるかもしれません。ひどい話になったら、人を殺してしまうかもしれない。それも罪です。でも、根源的な罪は何かというと、

「存在そのものが神さまに敵対している」

ということなんです。自分の存在そのものが神さまと相容れない。水と油。これが一番深い罪です。

「存在そのものが罪だ」

と言われたら、いやですよ、我々は。そうじゃありませんか。存在そのものが善であれば、その善から悪が出てくるのはおかしい。存在そのものが神さまに逆らうような存在だから、それが人を殴りつけたり、人を呪ったり、傷つけたりとかいう形になって現れてくるだけで、存在そのものが、在り方そのものがエゴイストなんです。我^がです。我に執^とらわれている。神さまよりも自分の方が大事なんです。

「神様が自分のことを大事にしてくれるなら、信じてやってもいい。それをやってくれなければ、そんな神様は捨ててしまえ」



と。要するに、神様は自分の召使めしつかいなんですよ、人間の信仰というのは。

「あそこの神社に行ったら霊験あらたかだから、あそこへお参りに行こう」

とか。こっちはまたこっちで、こういう病気にはこの神様、あの病気にはあつちの神様、受験勉強は天神様とか、いろんな何か——病院も内科、外科といろいろあるみたいに——神様も分業があつて、そのいろいろなところへ行く。要するに、

「自分を大事にして自分の願いを叶かなえてくれる神様なら信じてやってもいい。それでなかったら、そんなものは信じない」

と。つまり、自己が大事であつて、神々はその目下めした、召使という位置づけでしょ。この存在、そういう在り方がそもそもけしからんわけですね。本当の神さまといえれば理由なく、

「あなたはあなたでいらつしやるゆえに、私はあなたの御意みこころのとおりに生きていきます。自分を献けんげていきます」

という、存在そのものが神さまに献けんげられている。帰依きえしている。これが本当の義の姿です。「義」というのは正義ではなくて、御意が、神さまのご意志がすべてであつて、

「我意がいき、我がの思い、こんなものは捨てております。あなただけです」

と、これを貫いたのはキリストだけです。イエスという方だけですよ、「あなただけです」と言つて、死に到るまで従つた。ゲッセマネの祈りがそうでしょ。

私はいつも思うんですよ。ゲッセマネの祈りでなぜキリストは苦しまれたのか。なにも自分の生命が惜しくてなんていう、そんなレベルじゃないですよ。常に御意だけが大事であつて、神さまといつも一つ思いでおられた。父と御子とは一つであつた。

「我を見し者は父を見しなり」

「私と父とは一つである」

と言われた。それくらい一つで、分離できない姿ですつと生きぬいてこられて、

「わが意志にあらず、あなたの御意を」

ということば貫いてこられた方が神さまから捨てられて地獄に落とされようとしている。

「なぜなんですか。なぜ、そういうことを私は受け入れなければならぬんですか」

と。それが、私はゲッセマネの祈りだつたと思うんですよ。

神さまの義というものは、不義なる者には審判さはんとなつて顕れます。裁きです。義なる神さまの前に人間が立つたら、ふつ飛ばされるんです。義の奥には愛が隠されている。神さまは裁きながら救い上げようとなさっている。けれども、我々は裁かれてふつ飛んでしまつて、もう愛が届かない。私はそう思っている。キリストというお方は常に御意のままに生きておられるから、本当に義そのものです。我々が受ける審判を自分が代わりに受けとめてくださる。そして、隠されていた愛が人間に貫かれていくという、そういうことをキリストはやってくださった。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」



とキリストは叫ばれた。本当に棄てられたんです。棄てられることによって、隠されていた愛が我々の中に貫かれた。そういうことだと思っている。だから、

「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、私もまたあの十字架に架けられねばならない」

と。しかも、キリストは、

「人が私を十字架に付けるのではない。私は自ら十字架にかかるのだ」

と仰っておられます。

「私はそれを断る権利もあるし、受け入れる権利もある」

と——まあ、「権利」と言うのは変ですけれども——資格があると。

「私は自ら十字架にかかるのであって、人々が十字架につけるから嫌々、十字架につけられるのではない」

とはつきり、ヨハネ伝10章で言っておられます。

それは、我々が受けるべき裁きです。我々は本来、地獄^{ひつじょう}必定の身なんです、それをキリストが代わりに受けとってくださいました。そして、ご自分の中にある永遠の生命^{いのち}、そして神さまと一緒に生きる永遠の生命、それを私たちにくださっている。ですからもう、それだけでも大変なことなんです。

永遠の命を得るため

よく昔は、黄疸^{おうだん}で生まれた子の交換輸血というのがあった。黄疸で生まれた子どもの血を取って、そうでないきれいな血を上げるといふ交換輸血というのがあったけれども。キリストは、私たちの方のマイナスを全部吸い込んで、背負いこんで、自分の中にあるきれいな生命、愛の生命、義なる意志、それを全部我々にプレゼントとしてくださっている。こういうことをしてくださっている。そのことがここに出てきている。わずか一行のところです。

「¹⁴そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。¹⁵それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

(ヨハネ3・14〜15)

と。そして、

「¹⁶神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」

これはヨハネ伝を書いた著者の解説だと思えます。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷神が御子^{みこ}を世に遣^{つか}わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。¹⁸御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。¹⁹光が世に来たのに、人々



はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。21 しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」（ヨハネ 3・16～21）

と。こういう解説をヨハネはしてくれております。

「光が世に来たのに、人々は自分の行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ」と。光に照らされるといっているので、自分の悪が暴露されます。自分の本性が明らかになる。これは困る。だから、やはり闇の中に逃げ隠れて、正体が現れないようにするということ、そういうことです。ところが、

「真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

これは私は逆だと思っています。光に導かれてきた者は真理を行うようになる。なにか真理を行うから光が来るのではなくて、

「光に導かれてそれに身を委ねていく者は、気づかずして真理の道を歩んでいる。光の方に来る者は真理を行うことになる。それは光なるお方、御子によって導かれているから、そういうふうになっていく」と、そういうことだと思ふ。

天から来られる方

それから、3章31～36節（「天から来られる方」）。

「31 「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。32 この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。33 その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる。34 神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が、*霊*を限りなくお与えになるからである。35 御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた。36 御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。」（ヨハネ3・31～36）

と。「神の怒り」は神の裁きです。先程から言っておりますように、我々は自分の中に生命いのちはないから、せつかく

「生命を上げよう」と言われたら、



「はい、いただきます」

と言って、貫つた者は永遠の生命の世界に入れられて、そして天に迎えられる。しかし、「それは要りません」

と言って断つていたら、それはもう自分の行くべきところに行くほかない。それが結局裁きになってしまう。神さまは裁こうなんてなさってない。放っておけば、地獄行きが自分たちのありのままの姿なんです。

それは親鸞が言っている。弟子が、

「先生、あなたは法然上人にだまされているのではないのでしょうか？」

と聞いたたら、親鸞は何と答えたか。

「もともと自分も地獄^{ひじょう}必定の身である。放っておけば、自分ももう地獄行きといふのは必定、必ずそうなる。ところが、法然上人の教えに従って弥陀を信ずる。南無阿弥陀仏を唱える。それによつて天上へ、仏の世界に迎えられる。ありがたいことではないか。他に選択肢があるなら、そこに迷いもある。自分はこれにすがらなければ、もう地獄行きというのが決まっている。地獄行きのキップはたくさんもらっているけれども、天上へ行くキップなんてもらつたことがない。ところが、法然上人は、南無阿弥陀仏をとかく唱えなさいと。弥陀の本願によつて救われるということを教えてくださった。もうこれにすぎる以外に私はないではないか。他に選択肢があるなら、それは迷いもしよう。しかし、自分にとつてはもう地獄必定の身であつて、それを南無阿弥陀仏で天に迎えていただき、仏の世界にいだかれるなら、もうそれに私はすぎるよ」

と、そういうふうに親鸞は言つた。我々だつて同じです。

「もし、イエス・キリストさまにすがらなかつたら、あなたはどこへ行くの？」

「はい、地獄必定の身です。神の裁きの前に私はとても立てる者ではありません。義なる神の前に罪なる自分はとても立てません。地獄必定の身です。それがイエスさまという方は、我々のマイナスは全部自分がひつかぶつて、『あなたは生命の世界に入れ』と言って差し出してくださった。こんなありがたいものをお受けしないでどうするんですか。人はどうかしらん。ただ、自分にとってはこれしかないのです」

と。そういう気持ちです。だから、「信ずる」というのは、頭で考えるというものではない。本当にそのお方と一つにしていたいただくことです。

幼児のよひに

「主われを愛す」という讚美歌がありますね。461番。

「主われを愛す。主は強ければ、われ弱くとも恐れはあらず」



わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、われをあいす。」

と。主が私を愛してくださっている。主が私をつかまえて天国へ連れて行ってくださる。それに自分は委ねるだけ。つまり、赤ちゃんはお母さんに抱っこされていますね。赤ちゃんは自分では生きていけない。お母さんに抱っこされて、おんぶひもで抱かれて、行きたいところへ連れて行っていただく。そして、お乳をいただき、すべてがお母さんからもらうばかりです。その姿、これがキリストが言われた、

「幼児おさなごのようにならなければ、あなた方は天国へ入れない」

ということ。幼児は本能的にお母さんを信じきって、その胸に抱かれてスヤスヤと眠っている。キリストも幼児の如く、あの嵐の湖の中で舟板を枕にスヤスヤ眠っておられた。弟子たちは、

「先生、先生、大変です！ 溺おぼれますよ、溺れます。私たちはどうなってもいいんですか！」

「何を恐れているのか、あなた方は。神さまの護りの中にあるではないか」

と言って、キリストはあきれて、波に

「鎮しずまれ！」

と言われたら、波が静まったという。弟子たちは、「なんという人だ、この人は」と言って驚いた。だいたい、キリストの直弟子たちはみんな漁師さんでしょ。聖書の知識だとかそんなものはプロではありませんから。ただ、

「私に従って来なさい」

と召されたから、「はい」と言っただけなんです。そして、イエスが不思議なことを次から次になさる。弟子たちは、「これは凄い、これは凄い」と驚きの連続だった。キリストが十字架にかかれ、天にのぼられて、あのペンテコステの時に聖霊となって降くだってこられた。火の如きものが降ってきた。それから彼らは本ものになりました。

それまでは単なる漁師ですよ。無学ただびとの凡人です。無学の凡人を弟子に選ばれた。学者を選ばれなかった。これもありがたいことです。その道のプロはいかん、色がついているから。だから、ズブしろうとの素人がいい。宗教的な素人。宗教的に何も色の付いてないのがよろしい。つまり、赤ちゃんみたいに、幼児おさなごみたいに素直に受け入れる。弟子たちは大人ですから受け入れると、びつくりの連続です。びつくりしながら付いて行った。それが弟子たちの姿です。

しかしながら、彼らはイエスが十字架にかかる時みな逃げ出しました。でも、イエスはちゃんとそれを見通しておられたから、ペテロにむかって、

「ペテロよ、みんな逃げ出すからな。みんなが立ち直る時には、あなたがリー

ダーになって彼らを導いてやってほしい」

と、キリストはわざわざペテロに頼んでおられるんです。ところが、ペテロは何と言ったか。



「こいつらが逃げたって、私は絶対にあなたと一緒にいきます。命も惜しみません」と言つてたくせに、

「鶏が二度鳴く前にあなたは三度、私を呑むよ」

と言われて、そのとおりになつて、ペテロはさめざめと泣いたという場面が出てきますね。そんなふうにして、我々人間の側には信仰すらありません。

「私は信じます。死に到るまであなたと一緒にいきます」

なんて、肉の力がんばつてもどうしようもない。全部上からいただく。全部上からいただかないとだめです。それが幼児の姿。幼児は自分で何もできませんから、みんないただいています。我々もキリストによつて、今までの肉の路線、ガンバレガンバレ路線を捨て去つて、ガンバラない、すべていただきますという、それに転換するのが大事なんです。

御子の権威

次に、5章19〜40節（「御子の権威」）に行きましよう。

「¹⁹そこで、イエスは彼らに言われた。」「はつきり言つておく、子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、

子もそのとおりにする。²⁰父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に

示されるからである。」（ヨハネ5・19〜20）

ずっと福音書を見てますと、父なる神さまはキリストぬきで直接に何か業をなさっていない。雷が鳴つたりなんかしているのは、父の御意かどうか知りませんが、少なくとも、神さまが何か御業をなさるのは、必ずイエスという方を通してなさっている。そうでないと、ただの自然現象になつてしまいますから。そうでなくて、イエスという方を通して救いの御業、癒しの御業、いろんな奇蹟の御業をなさっている。

今度は私は皆さんに申し上げる。皆さん一人びとりを通して、神さまは御業をなさろうとしている。キリストが直接に誰かのところに働きかけて、寝てるのに呼び起こして、

「あなた、あなた！ あなたを私の弟子にするから、明日から付いて来なさい」

なんて、そんな直接的な啓示を受ける方は——たまにはいらつしやるかもしれませんよ——しかし、普通はそうじゃない。普通は人を通して、

「イエスというのはこんな素晴らしい方だ。自分は悩んでいる時にこんなふうにして救われた。救われたから、今日までいろんなことがあつたけれども、本当に私はよかつたと思つている。だから、あなたも一緒に導かれようと思いませんか」

なんて言つて、人を誘つてくる。そしていつのまにか、その人も、

「あつ、そうだ。あなたが言つてくれたとおりでつた」

というかたちで信者さんが増えていく。これが伝道という仕事だと思う。直接に、我々をぬきで、神さまが一人びとりの中に夢に現れて、というようなことは、まずはないんじゃない



ないでしょうか。私にはそんなふうに見える。

だから、皆さんお一人お一人がキリストによつて新しく生まれたら、今度はその生命を、^{いのち}霊なる生命を分かち与えていくという使命があるんです。肉の命は、我々は男女の結合を通して次の世代へ伝えていきますけれども、霊の生命はキリストからいただいた。キリストがうちに宿られた。その宿られた生命は、それをまた、回りの人たちにお伝えしていく形で分かち与えていくという、その使命が与えられている。これは聖なる使命です。

それをやらないで、自分の中にかかえこんでいたら、それは濁つていつて死んでしまいます。活動しない生命は死んでいく。壊死^{えし}と言いますね。ちょうど指なんかでも縛りあげて青くなつて、やがて血が通らなくなると壊れていくでしょ。それと同じように、生命はたえず分かち与えることを通して拡充していくし、伝えられていく。生命を後生大事にかかえておれば、それはちょうどあの「タラント」の話に出て来ますね。神さまから、

「あなたには5ミナ与える。あなたには10ミナあたえる。あなたには1ミナ」

「いや、神さま、あなたは怖い方だから、それを壺に入れて地面に隠しておきました」
なんていう話があるでしょ。そしたら、何と仰つたか。

「銀行に預けたら、利息ぐらいもうかつたのに」

と。キリストはそんなことを仰っている。要するに、自分がいただいたものを自分だけにかかえこんでいたら絶対にだめ。必ず生命を分かち与えていくことによつて増殖していく。

「¹⁹……」はつきり言っておく、子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。

²⁰父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業^{わざ}を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。²¹すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子

も、与えたいと思う者に命を与える。²²また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。²³すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。

²⁴はつきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。²⁵はつきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今や

その時である。その声を聞いた者は生きる。²⁶父は、御自身の内に命を持つておられるように、子にも自分の内に命を持つようにして下さったからである。²⁷また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。

²⁸驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、²⁹善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。



³⁰わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心みこころを行おうとするからである。」（ヨハネ5・19〜30）
この全体を見ますと、イエスという方は

「自分からは何もできない。自分は、父が「せよ」とお命じになることをそのままやるだけ。自分からは何もやることもないし、教えることも何もありませんだよ」

と言っておられる。それは、イエスという方は本当に父なる神さまにすべてを委ねきつていらつしやるから。また、父なる神さまの方も、イエスを通して御業をなさろうとしている。だから、父と御子——二人の共同作戦というかな——共同事業として伝道の御業、救いの御業を実現しようとなさっている。そのことがよくわかります。

それからもうひとつ、

「墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き」

なんていうことが出て来ます。それから、

「わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。」

と、こういうことも言っておられます。

だから、「永遠の生命いのちを受ける」ということは、なにも死んでからのことではなくて、今、現にもう——キリストは、「自分を受ける者」と仰らないで、「自分を遣わされた神を受け入れる者は」という表現をなさっていますけれども——私にとっては、

「イエスご自身をそのように受け入れる者はもう既に死から生命いのちに移っている」ということ。「終わりの時に甦る」とか、そんな遠い話ではなくて、

「今、現にイエス・キリストを受け入れた瞬間に、もう新しい永遠の生命を賜ってしまっている。その人はもう死なない。そういう素晴らしい世界をイエスはここで宣言してくださっている」

と。私はそれを100%にいただいております。

イエスについての証し

それから次の「イエスについての証し」（ヨハネ5・31〜40）です。

「³¹もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。³²わたしについて証しをなさる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなさる証しは真実であることを、わたしは知っている。³³あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。³⁴わたしは、人間による証しは受けない。しかし、あなたたちが救われるために、こ



これらのことを言っておく。³⁵ヨハネは、燃えて輝くともし火であった。あなたたちは、しばらくの間その光のもとで喜び楽しもうとした。ヨハネは尊敬されていた。ヘロデによって殺されますけれども、民衆からは非常に慕われていた。

³⁶しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証している。³⁷また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる。

「証言は二つの証しがある」ということになっていた。キリストは、自分の業が私のことを証している。それから、父ご自身が私のことを証ししておられる。だから、これで二つが揃うというわけです。次が素晴らしい。

あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿を見たこともない。³⁸また、あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである。³⁹あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。

これは旧約聖書のことです。旧約聖書を一生懸命に研究して、永遠の生命はどこにあるかと探している。ちよつと待つてと。

「旧約聖書は私のことを証している。永遠の生命そのものが目の前にあるのに、それを排除して、文書研究をやつて何になるの？」

と。今でも言えそうです。聖書研究、聖書学者、神学者、それが必ずしも永遠の生命を本当に生きているかどうか、それは別問題です。文書の研究によつて生命なんかこない。生命そのものであるキリストというお方をいただいてしまって、そのお方と一つにされる。自分が一つになるのではない。キリストが私と一つになってくださるという恵みなんです。それを単純に受け入れて、そのように歩んで行く者には永遠の生命を与える。しかし、文書研究をやっているからといって、生命は来ませんよと。

ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。⁴⁰それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしません。（ヨハネ5・31〜40）と、当時の学者たちを批判されたわけです。

イエスは命のパン

次の6章26〜63節、「イエスは命のパン」というところ。ここは、「私を食べる、私を食べる」ということを盛んに言っている。

「²⁶イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」



この場面は、五つのパンと二匹の魚で五千人以上の人たちを満腹させられたということがあります。そして、残ったパンの屑を集めたら、十二の籠がいっぱいになったという話が出てきますね。その奇蹟に驚いた群衆は、イエスがやがて姿をくらまされると、それを追いかけて、何とかしてこの人を捕まえようとしてやって来た。それに対してイエスは言われた。

「あなた方が私を追いかけてきたのは、パンを食べて満足したからなのだろう。パンが欲しいんだろ。私そのものじゃないね」

ということイエスは言われた。つまり、パンという、肉体を養ってくれる糧が欲しくてイエスを捕まえにきた。でも、イエスは、

「パンはシンボル(象徴)だ」

と。あの五つのパンと二匹の魚が、キリストの祈りによって——天にそれを捧げて祈られた——それによって分かち与えて与えても、それが増え広がっていくという奇蹟。これは何を表しているか。それは、イエスは単にパンを与えるのではなくて、パンを通してイエスの生命、永遠の生命が、分かち与えられれば分かち与えられるほど、豊かに増え広がっていくということをお示しになりました。それなのに彼らはパンそのものを求めてやって来た。だから、それはお門違いだよということと言われた。

²⁷朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。

つまり、

「永遠の生命をうちに宿して、その生命で輝いて働くような働き方をしなさい」ということです。

これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。

だから、私たち信者というのは、イエスが永遠の生命をくださった、その生命をいただいて本当に大事なことをさせていただく。この世でなすべき業をしつかりやらせていただく。そういうことなんです。

²⁸そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うとき、²⁹イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、つまり、キリストを信受すること、

それが神の業である。」³⁰そこで、彼らは言った。「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいませるか。³¹わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」³²すると、イエスは言われた。「はっきり言っておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのま



このパンをお与えになる。³³神のパンは、天から降^{くだ}って来て、世に命を与え
るものである。」

彼らは、「では、どんなしるしをやってくださいるんですか」なんて、またそういう徴を求めだした。「モーセはかつて荒野でマナを先祖たちにくれました。あなたは何をくれますか」なんていうようなことを言う。それに対してイエスははっきり言われる。

「モーセが天からのパンをあなたの方に与えたのではない。わたしの父、神さまが天からの真のパンをこれから与えようとなさっている。モーセが与えたパンを食べた者は結局はみんな死んだ。一時的に空腹を満たして、肉体を養っただけのこと。ところが、わたしというパン、これは生命のパンであって、わたしを食べる者は死なないんだ」

と。そのことを仰った。

³⁴そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちに下さい」と言うと、³⁵イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。³⁶しかし、前にも言ったように。あなたがたはわたしを見ていないのに、信じない。³⁷父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。³⁸わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。³⁹わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。⁴⁰わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」(ヨハネ6・26〜40)

と、こういうことを言われた。

終わりの日に甦らせる

だから、父の御意は、このイエスという方を本当に受け入れる者、そのお方と一つになる者は、これはもう永遠の生命をいただいでしまう。そして、決して滅びない。さかんに、

「終わりの日に甦らせる」

ということが出てくるけれども、私は、「終わりの日」というのは遠い将来ではなく、今、日々、現在が「終わりの日」であると、そう受けとっています。熊本の大地震のように、明日何が起こるかわかりません。たえず我々の人生というのは危機に瀕している。いつどこでピリオドを打たれようと、「万歳、ハレルヤ！」と言って、天上にのぼっていく。そういう生き方をしなさいということです。

これを小池辰雄先生は、



「終末的現在を生きる」

という難しい表現をされた。「終末的実存者」なんていう言葉も使われた。つまり、たえず終わりは近づいてきている。我々は人間としての寿命の終わりというのがだんだん近づきますね。私なんかは本当にあとちよつとですよ。皆さんはまだまだ大丈夫かもしれないけれども、私なんて皆さんと比べたら、地上の人生の終わりはとても近いわけです。

それが近づいてきていると同時に、最後の審判という形で神さまの裁きというのがいつ来るかわからない。そういう世の終末が近づきつつある。それから、人間としての寿命の終わりが近づきつつある。たえずそういうものに直面している。そして、いつそれがあろうと大丈夫という、そういう生き方をしなさいということですよ。明日もまたその次の日も、のんびんだらりといつまでもいつまでも続いていくという、そういうのんびんだらりの緊張感のない生き方ではなくて。たえず明日にも終わりが来るかもしれないという、そういう緊張感の中で、しかし、

「いつ何がきても、私は地上の命を終えれば必ず天上に迎えられて羽ばたいて行くんです」

という、そういう確信を持って生きていなさいと。それは自分からは湧いてこない。いたたくものです、プレゼントです。キリストはまさにそれを我々に差し出して、与えようと思つて地上に来てくださったんです。その用事がなければ、天上からわざわざおいでにならない。天上で機嫌よく過ごしておられればよかった。けれども、天上で地上を覗きますと、あまりにも悲惨で、人々は悲しそうです。だから、神さまは、

「おい、お前、行ってやれ。みんな苦しんでいる。彼らの所へ行つて、この永遠の生命を分かち与えてやれ。そして、みんな私のもとへ連れてこい。それがお前の役目だ」

と言つて送り出された。ところが、人々は、

「こいつを殺してしまえ、殺してしまえ。そしたら天下は俺たちのものだ」

なんて、そういうことが書かれていますよ。だから、本当にイエスという方は、父の御意みこころと人間の欲深さ、業ごうの深さ、その板挟みで苦しみました。しかも、この方は十字架にかかりながら、

「彼らを赦してやってください。彼らは自分のやっていることがわからないでいるのですから」

と言つて、執り成しておられる。

「右の頬ほおを打たれたら、左の頬を出せ」

くらいの話ではないんですよ。ご自分の命をああしてズタズタに掻き裂かいてくる者たち、しかも、それは恵みを受けた者たちばかりです。それがまるで手のひらを返すように、

「バラバを許してやれ。イエスを十字架につけろ！」



と、ワーツと群衆心理で駆り立てられて叫んでいる。それをイエスは十字架の上から、「彼らを赦してやってください。彼らは自分で何をしているか、わからないからです」

と、執り成しておられる。それだけでも涙が出ますよ。

私は日本人であってユダヤ人ではありません。けれども、民族の、人種の区別なんて大したことではないではありませんか。地球は一つ、太陽も一つ。一つの太陽が地球を照らしている。究極なる愛の神さま、永遠の次元にいましたもう神さまが、ご自分の分身として、イエスという方を地球にお送りになった。これがインドではなくてユダヤであっただけの話です。そして、その方が父の御意みこころだけを大事にした。しかも、御意は愛でした。しかし、愛が貫かれる前に義の裁きがある。

「その裁きは私が引き受ける。だから、どうぞ、裁きの面は私が引き受けるから、あなたの愛をどうぞ人間に貫いてください。その愛とは永遠の生命を与えるということです」

と。しかし、罪深い人間がそのまま永遠の生命を受けとったら、大変なことになりますよ。何をやらかすかわかりません。

だいたい、人間は人格的に成熟する前に「知恵の樹きの果み」を食べてしまった。だから、科学技術なんかを全部、核兵器だとか何とか、そういう悪い方へ使うようになったでしょ。あれが本当に人間として神さまのような人格に出来上がってから知恵をいただいたら、プラスの方にしか使わないはずなのに、出来上がっていない段階で知恵の果を食べてしまった。だから、それを我が物顔にいろいろ使って、現実に核兵器だけでも何千個とあるみたくですね。それからまた、近くの国でそんなものを用意して「いつでもぶっ放すぞ」とやっているのがありますし。それが現実です。それに対してキリストは、

「たとえ核兵器なんか爆発しようが、何がどうなるうが、そんなものでぶっ飛ばされないだけの生命を私はあなた方に与える」

と、それをはつきりと約束してくださった。だから、一番最初に引きましたように、

「身体を殺しても、それ以上の何もできないやつらを恐れるな。身体を殺した後には地獄に投げ入れる権威ある方を恐れなさい。その方を信じなさい」

ということを一番始めに言ってくださった。ですから、私はこういう聖書の言葉をずっとたどっていますときに、決して昔話という感じを受けない。現在そのものだと、現在の現実そのものだと、そういう感じでお受けしております。

命を与えるのは、**霊**

「41 ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降くだってきたパンである」と言



われたので、イエスのことでもつぶやき始め、⁴²こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降ってきた』などと言うのか。」⁴³イエスは答えて言われた。「つぶやき合うのはやめなさい。⁴⁴わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。⁴⁵預言者の書に『彼らは皆、神によって教えらる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る。⁴⁶父を見た者は一人もいない、神のもとから来た者だけが父を見たのである。⁴⁷はつきり言うておく。信じる者は永遠の命を得ている。⁴⁸わたしは命のパンである。⁴⁹あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んでしまった。⁵⁰しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。⁵¹わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

⁵²それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに^{はげ}激しく議論し始めた。⁵³イエスは言われた。「はつきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。⁵⁴わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。⁵⁵わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。⁵⁶わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。⁵⁷生きておられる父が私をお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。⁵⁸これは天から降ってきたパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」⁵⁹これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

⁶⁰ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。ここに「弟子たちの多くの者」とあります。十二弟子どころでなく、弟子たちはたくさんいたみたいです。

「実にひどい話だ。だが、こんな話を聞いていられようか。」⁶¹イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつまずくのか。⁶²それでは、人の子がもいた所に上るのを見るならば……。⁶³命を与えるのは、^霊である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」(ヨハネ6・41〜63)



この6章63節ですが、

「命を与えるのは、**霊**である。肉は

生まれながらの我々の人間性といったもの、生まれながらの「ヒューマンネイチャー」(human nature 人間性) というものは、永遠の世界から見たら、

何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は**霊**であり、**命**である」
 「わたしがあなた方に話してあげた言葉そのものが**霊**なる言葉、それが**霊**であり**命**である」という。

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と。
 これを『和英対照新約聖書』の英文では、

「人はパンだけでは生きることができない。人はおおよそ肉体を養ってくれるパンだけで生きていくことはとうていできない。人が本当に生きるのは神のみ口から出る一つ一つの**霊**なる言葉をいただいて初めて、人の**霊**というものは生きていく」

と書いてある。だから、私たちは単なる物質的存在ではない。物質的存在としてのヒト。生物学の世界では「ヒト」と、わざわざカタカナで表されますけれども、そういう生物体としてのヒト。これはこのパン、肉体を養う糧で生きていくでしょう。でも、人格、**霊**、**霊**なる人格者は神の御口みから出る一つ一つの言葉で生きる。

「初めに**霊**言霊言」

とありました。

「私が語った言葉は**霊**であり**生命**である」

とキリストは言われた。だから、

「キリストの言葉を本当に食べる者、それと一つになる者、その者には永遠の**生命**が宿る。それを毎日、毎日くらべていかなければ、あなたの**霊**の**生命**は枯れていくよ」

ということ。よく、「聖書は毎日読まねばなりませんか？」とか、「一日に何ページ読んだらいいんでしょうか？」と、そういうことを聞かれる方がある。

「それはおかしいのではないですか。キリストといつも一緒になければ生きていけませんというのが本当ではないですか。あなたは、キリスト抜きでも何日か生きていけるなら、それはおかしいのではないですか」

と、私はむしろそう申し上げたい。何ページ読むかではない。本当に一つみことばの御言でも、本気でいただければ、そこで**生命**がくる。**生命**が満ちているのを感じることができる。それのうちうちに宿して一日をしつかり生きていく。そして、まあ晩にはクタクタになるでしょう。

「ありがとうございます。どうぞ、今晚一晩休ませてください」

と。そして、朝起きたら、



「目覚めることができました。ありがとうございました。今日も一日よろしくお願
いいたします」
という、その繰り返してはでないでしょうか、私たちは。

イエスは良い羊飼い

その次にいきます。10章7〜18節（「イエスは良い羊飼い」）のところ。

「⁷イエスはまた言われた。「はつきり言っておく。わたしは羊の門である。
⁸わたしより前に来た者は皆、盗人^{ぬすびと}であり、強盗である。しかし、羊は彼らの
言うことを聞かなかった。⁹わたしは門である。わたしを通って入る者は救わ
れる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。¹⁰盗人が来るのは、盗んだ
り、屠^{ほぶ}ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊
が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。¹¹わたしは良い羊飼いで
ある。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。¹²羊飼いでなく、自分の羊を持た
ない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は
羊を奪い、また追い散らす。——¹³彼は雇い人で、羊のことを心にかけていな
いからである。¹⁴わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、
羊もわたしを知っている。¹⁵それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父
を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。」（ヨハネ
10・7〜15）

だから、ここでいう「知る」というのは、単に知識的に知るのではなくて、本当に一如一体、
その者と運命を共にするという一体感が出ています。そういった知り方です。

それからその次は更に、この囲いの中にいる羊ではなく、キリスト信者でないまだ未信
者の方がたくさんいる、そういう人たちをも導いてあげなければならぬ。そしてつい
に一つの群れになる神さまの子どもたちが生まれるようにと、そういうことを言っておら
れる。

イエスは復活と命

それから次に、11章17〜26節（「イエスは復活と命」）。これはラザロを復活させられた場面です。
時間の関係で少し飛ばしながらやりますが、要するにこれは、ラザロが死んでもう四日も
たつて墓に葬られてしまっている。ところが、イエスはこのラザロとその姉妹であるマル
タとマリヤをとて愛しておられた。よく立ち寄られたようです。十字架にかかる直前で
すけれども、キリストはこのベタニヤのラザロの所にも立ち寄っておられます。そういう
ことがあるんですが、この時は、まだベタニヤに入っておられないで、15スタディオンほ
どのところにいらつしやった。ところが、ラザロは重い病気で死んでしまった。イエスは



それをちゃんともう見通しておられた。現実に行つてごらんになりますと、ラザロは墓に葬られて四日もたつていた。そして、マルタもマリヤもこのイエスの所にやつて来て、

「あなたが一緒にいてくださったら、ラザロは死ぬはずがなかったんです。あなたがいらっしゃらないばかりに、ラザロは死んでしまいました。そしてもう墓に葬られております。でも、あなたが神さまにお願いくださるならば、神さまはどんなことでも聴いてくださるはずですよ」

と言つて、おすがりした。そうすると、イエスは言われた、

「あなたの兄弟は復活する」

と。すると、マルタもマリヤも同じ答えをする、

「はい、終わりの日に甦ることは知っております」

と。つまり、彼らにとつては、「終わりの日」はいつ来るかわからない。遠い将来です。それまでは墓の中で眠り続けると、そういうふうにいる。それに対してイエスは、

「遠い先の終わりの日ではない。今だ。今、ラザロは甦る」

と言つて、激励される。そして、現実には墓の前に行つて、大きな石で墓が塞がれている、

「石を取り除きなさい」

と。邪魔になるものは除けなさい。人間のできることはやりなさいと。人間にできる邪魔ものは除ける。しかし、死んだ人間に生命を与えるということは神さまにしかできない。それをイエスはなさった。イエスは、

「父よ、感謝いたします。あなたは私が祈ることはどんなことでも聴いてくださるということを私はよく知っております。だから、今、人々が本当にあなたを信ずることができるよう、どうぞ御業を顕してください」

と言つてお祈りしてから、

「ラザロよ、出てこい！」

と叫ばれたら、ラザロは出てきたという。そういう記事ですね、ここは。

それから、12章23〜36節。これは、「一粒の麦、地に落ちて死なずば」というところです。少し飛ばしまして、

「³⁵イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわからない。³⁶光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」(ヨハネ12・35〜36)

と。光であり給うキリストに導かれて行くならば、絶対大丈夫です。

イエスの祈り

それから、17章1〜3節。これは、「永遠の生命」とは、というものを告白しておられる



箇所です。弟子たちに別れの言葉をずっと告げられましてから最後に締めくくりに、イエスはお祈りになる。

「イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。²あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです。³永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」(ヨハネ 17:1-3)

と。永遠の生命とは何か。永遠の生命をいただくというのはどういふことなのか。これは、「あなたご自身と
唯一のまことの神であるあなた。神々はあちらこちらにいます。いろいろな神々がいます。けれども、唯一のまことの神であるあなたと、

あなたがお遣わしになったこの私を本当に知ることが永遠の命なんです」

と。非常に単純です。我々はイエスというお方を100%受けとれば、イエスという方の中に神さまご自身が100%宿っておられますから。

「神を見た者は一人もない。しかし、イエス・キリストが神を躪されたのである」

と、ヨハネ伝の一番始めに出てきた。だから、このイエスというお方こそが、見えない神さまを見える形で躪してくださった、いわば神の現象体——見えないものが見える形で現れてきた——それがイエスという方。だから、

「このイエスという方を100%受けとる。あるいは、イエスという方と一つにさせていただく。これが永遠の命だ。このイエス・キリストさまと本当に毎日毎日一つになって生きていく、それが永遠の命を生きていくという生きざまですよ」

ということ。非常に単純でしょ。難しい知識がいっぱいなくてもいいと。

「本当に主さま、あなたが私の命そのものです。あなたは私のすべてです。あなたの御意のままにこの私をどうぞお用いください。私にとっては自分の意志なんてものは捨てます。がんばりません」

と。「がんばる」というのは「がをはる」ということ。がんばりませんと。

「あなたの御意に従って、私をいかようにでもお用いください。もう私は自分の力とか、自分の意志とか、そんなもので歩むのはもう飽き飽きしました。もう疲れます、そんなものは。自分を抛り所として生きていくのはしんどい限りです。それは全部やめました。あなたに完全にお任せです」



と。京都の集会で前回、「無為自然」というお話をしたんです。

「無為自然。自分が何もしません。自分自らは何もしません。自ずから事柄は成つていきます。それはおのずから。自分が自分で何もしません、みなお委ねしますと言ったときに、おのずから成るようにちゃんと神さまがご配慮してください。」

と。そういうことなんですね。マタイ伝でも、

「思い煩うな」

と何回も出てくる。

「何を食べようか何を飲もうかと、食べ物のことや着物のことで思い煩わなくていい。空の鳥を見てごらん。野の花を見てごらん。何もしてないではないか、無為じゃないか。だけど、ちゃんとおのずと必要なものは全部備えられている。思い煩うことなく、生き生きと空の鳥は羽ばたき、野の花は美しく咲いているじゃないか。あなた方はもつともつと大事に思われている存在なんだよ」

と。だから、「自分」というようなものはもう全部やめて、みずから何もしない、任せる。そしたら、おのずと必要なものは全部そなわってきます。そういう生き方をしなさい。それが「永遠の命」の生き方ですよ。ですからこの、

「永遠の生命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしくださいましたイエス・キリストと本当に一つとされることです」

というのと、この無為自然というのが私は一つだと思えます。

それから、小池辰雄先生はその次に言われたのは、この「無為自然」から次は、「自然靈然」。これは神さまの世界ですよ。そういった自然に委ねることがまさに神さまの願っていらつしやるところにピッタリと一つになっていく。自然靈然。それから、やがてそれは、「神然」というところまでいくんだということも言われた。まあ、小池先生というのは非常に直観のするどい方ですから、そういうものをしっかりと掴んで我々に話してくださいとお方です。ですから、この永遠の生命を生きるということの一番大事なところはここなんです。

「永遠の生命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わし

くださいましたイエス・キリストと一つになることです」

と。この「知る」というのは、知識ではない。「一つになる」ことです。だいたい、肉体的な合一を表す言葉なんです、この「知る」というのは。

「アダムはエバを知った。そして子どもが生まれた」

ということになっていますように、「知る」というのはそういった肉体的な結合を表す言葉です。そのように、神がお遣わしになったこのイエスという方と本当に一つにしていたたく、また、イエスの方はそれを願っててください。

「御意はあなた方が永遠の命を得ることだ」

と。永遠の生命はイエスの中に宿っていますから、その方が私たちと一つになってください。



そしたら、私たちは「永遠の生命」者です。そういう生き方。これを私たちはいただいておりますし、願っております。

信仰によって義とされて

それから次は、「ローマの信徒への手紙」5章1節〜6章11節（「信仰によって義とされて」というのをあげました。

もうこうやって、信仰、イエスをいただくということによって、我々は神さまとの間に敵対関係がなくなった。裁きの神ではなくなった。

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、²このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。³そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、⁴忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。⁵希望はわたしたちを欺く^{あぶせ}ことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」（ロマ5・1〜5）

と。私たちは地上を宿としているかぎりには、苦難・患難は絶対つきものです。患難・苦難のないような人生なんてはありません。でも、患難・苦難から逃げるのではない。それを突き抜けて、ますます輝いていく。よく昔、電球の中にタングステンというのがあって、それが抵抗して光が出てくる。あれがプツンと切れたら電球は光ってくれない。タングステンが抵抗によって光り輝く。それと同じように、我々には苦難・患難やいろいろな重荷があるからこそ、キリストの光がますます輝く。それがなければ、凡庸^{ほんよう}なんの魅力もないつまらないただの生き物で終わってしまう。

それが素晴らしい霊的人格になるには、必ずそういった患難・苦難によって我々を鍛えあげてくださる。鍛えあげてくださるのであって、我々は自分の力によらない。必ず委ねていくんです。委ねることを知っているのが我々の特権です。この世の人は委ねることを知らない。自分でやらねばならないと思っ行って行き詰まって、そして最後は自分で自分の命を断つというような悲劇が生まれます。けれども、そうではなくて、

「神さまは我々に必要なものをすべてご存知である」

と、キリストが言っておられる。だから、

「まず、神の国と神の義を求めよ」

と言われる。まずキリストご自身が、キリストにおいて神さまが私たちに何を願っていらっしゃるか。どう生きることが願っていらっしゃるか。そちらに眼を向けていけば、必ず必要なものは添えて与えられると言う。



「大丈夫だ、何も思い煩うことはない。空の鳥でさえ、野の花でさえ、あのよ
うに素晴らしく生き生きと生きているではないか。ましてあなた方を放つて
おかれるはずがあるうか」

と。そういうことなんですね。そのことがここに書かれています。

アダムとキリスト

それから次の「アダムとキリスト」(ローマ5・20～21)のところ。これも、アダムが罪を犯した。それで人類に罪が忍び込んできた。それを引き受けて、キリストという一人の義人が義を貫いてくださった。その義は我々全部に及んでいくということを言っている。

「²⁰律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。

「律法」というのは、神の御意みこころを表わした法律的な表現形式で、「これは罪である。これはしてはならない」とか、「すべし、すべからず」という、そういった人間の行動規範を文章で表わしたのが律法でした。それに違反するなら「罪」というふうに断罪されるわけです。律法がなければ罪は認識されない。でも、律法が出てきたために、罪がどんどん増え広がってきた。

しかし、罪が増したところには、恵みはなおいつそう満ちあふれました。²¹こ
うして、罪が死によって支配していたように、

罪の支払う報酬は死である。罪というものの結末は死というものだったと。ところが、恵みというものは、イエス・キリストの義によって私たちに命を与えてくださる。そういうことをここで言っている。

恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永
遠の命に導くのです。」(ローマ5・20～21)

罪に死に、キリストに生きる

次の見出しは6章、「罪に死に、キリストに生きる」(ローマ6・3～11)です。

「³……キリスト・イエスに結ばれるために洗礼(バプテスマ)を受けたわたし
たちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。

バプテスマですね。なにもいわゆる「水の洗礼」ということにこだわることではない。むしろ、イエス・キリストの「霊の洗礼」を受けるといふふうを受けとっていただいたらよろしいと思います。イエス・キリストの霊的な洗礼を受けた者は、それによつてもう既に死んでいるんだと。

⁴わたしたちは洗礼(バプテスマ)によつてキリストと共に葬られ、その死にあ
ずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によつて死者の中
から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。



キリストと共に葬られて、その死にあずかってしまっている。十字架で一緒に死んでいる。十字架で私たちは一度死んでいる。ちょうどキリストが復活されたように、私たちも今度はキリストと一緒に新しい命に生きることになると。だから、

⁵もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるとすれば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。⁷死んだ者は、罪から解放されています。わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、

これは、

「十字架の上で一緒に死んでいます。十字架でキリストが死んでくださった。その時に私も一緒に十字架で死んでいます」

と、そのように受けとることなんです。

「我れキリストと偕に十字架につけられたり。最早^{もはや}われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」

とガラテヤ書2章20節に出ています。そのように私たちがキリストと共にその十字架上の死の姿にあずかるならば、あのご復活の姿にもあずかることになるでしょうと。

⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。

⁷死んだ者は、罪から解放されています。⁸わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。⁹そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。¹⁰キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。¹¹このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」(ローマ6・3〜11)

と。そういうことを言っています、やや理屈っぽいですがけれども。

信仰に生きる

それから、「コリントの信徒への手紙二」の4章16〜18節(「信仰に生きる」)のところ。これは私の大好きなところです。

「¹⁶だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、

滅びていくとしても、



わたしたちの「内なる人」は、
霊的人格、霊人である私たちは、

日々新たにされていきます。¹⁷わたしたちの一時の軽い艱難^{かんなん}は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。¹⁸わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えるものは一時的ですが、

見えないものは永遠に存続するからです。」(コリント二4・16～18)

本国は天にあり

それから、「フィリピの信徒への手紙」の3章18～21節。これはパウロが涙を流して、キリストを信じない方々、自分を頼りにしてキリストに帰ろうとしない人たちのことを嘆いて、訴えている箇所です。

「¹⁸……今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでい
る者が多いのです。¹⁹彼らの行き着く所は滅びです。彼らは腹を神とし、
自分を神としていること。「腹」というのは自分自身です。

恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。

現代の日本でも同じようなことが言えると思う。「神さまのことは自分は関わりはありませ
ん。私は自分だけを信頼して、自分なりにやっています。どうぞ、お構いなく」と言っ
て、我々は門前払いをくらいます。しかし、それは滅びだという。自分自身を神としている。

²⁰しかし、わたしたちの本国は天にあります。

これは文語の聖書では、

「我らの国籍は天に在り」

と書いてありました。私たちの国籍は天にありますと。

そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、
やがて来てくださる再臨です。

わたしたちは待っています。²¹キリストは、万物を支配下に置くことさえでき
る力によって、わたしたちの卑しい^{いや}体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変
えてくださるのです。」(フィリピ3・18～21)

これはもの凄い希望です。私たちは向こうの世界でみすばらしい姿でない。輝く姿に変
えられて天に迎えられる。みすばらしい姿で行ったら、向こうで小さくなっていないか
ならないですよ。そうではない。素晴らしい栄光の姿に変えられて天上に迎えられる。

それと同じことはコロサイ書でも言っている。「コロサイの信徒への手紙」の3章1～4節。

「さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあ
るものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。



2 上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないうにしない。3
あなたがたは死んだのであつて、あなたがたの命は、キリストと共に神の内
に隠されているのです。4 あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あな
たがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」（コロサイ3・1）
4）
と。それから、「ヘブライ人への手紙」の13章8節では、
「8 イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。」
（ヘブライ13・8）
とあります。

愛の讃歌

それから最後に引き寄せたのは、「コリントの信徒への手紙一」の13章、あの「愛の讃歌」
です。

「たとえ、人々の異言、^{いげん}天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、
私の思いは決して人には伝わらない。むしろ、

わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。2 たとえ、預言する賜物^{たまもの}を持ち、
あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほど
の完全な信仰を持つていようとも、愛がなければ、無に等しい。

そんなものは何の役にも立たない。

3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に
引き渡そうとも、

焼身自殺をやるうとも、

愛がなければ、わたしに何の益もない。

何の意味もありませんと。

4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。

5 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨み^{うらみ}を抱かない。6 不義を

喜ばず、真実を喜ぶ。7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべて

に耐える。」（コリント一13・1〜7）

「愛は忍耐強い」

という。人間というのはなかなか、「忍耐強い」というのはできにくいことです。気が短い
人はやはりいっぱいいますよ。「瞬間湯沸器」なんていうあだ名のついている人もいる。す
ぐカーツとなつて怒りだすという。それはこの「忍耐強い」の反対ですから、そういう方
はこのコリント書に従つていただいて、「愛は忍耐強い」というふうな。瞬間湯沸器ではあ
りませんと。



「愛は情け深い」

ものです、そう簡単には怒ったりしませんよと。それからあとはかなり消極的な、

「ねたまない、自慢しない、高ぶらない。礼を失しない」

というふうには、全部否定形ですね。それから、

「自分の利益を求めない」

これは大事なことです。人間というのはどうしても自分の利益を考えてしまいますから。

「あの人と付き合いしておけば、何かいいことがあるかもしれない」

と、人を自分の手段にする。カントは、

「人を絶対に手段としてはならない」

と言ったそうです。人間は、だいたい名刺を交換するのは、

「この名刺を渡しておいたら、何か自分のためになることを相手がしてくれるかもしれない。相手から名刺をもらっておけば、この名刺を使って何か将来役立つこと

とになるかもしれない」

と。まあだいたい、事業をやっている方、取引をやっている方は、そういう形でやりましょう。政治家だったら、「顔を広げておいて一票でも多く票を」という、そういうこともあるでしょうし。これは全部、「自分の利益を求めている」ということかもしれません。それから、

「いらだたない」

と。いらだつというのは困ったものですね。いらいらする。回りの人もしんどいですよ、いらいらする人の回りにいまして。それから、

「怨みを抱かない」

怨みを抱く、これも困ります。それから、

「不義を喜ばずして、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」

これはキリストのお姿です。すべてを耐え忍んで引き受けてくださった。すべてを信じてくださった。自分たちは不信実な人間なのに、その不信実な自分をもキリストは信じぬいてくださった。ペテロをも信じぬいてくださった。すべてを望んでくださった。見えるところの背後にあるものに望みを託してくださった。そしてすべてを耐えてくださった。

。愛は決して滅びない。預言は**廃れ**、異言は**やみ**、知識は**廃れ**よう。わたし

たちの知識は**一部分**、預言も**一部分**だから。

愛は永遠であると。預言とか、異言とか、知識は一時的なものである。つまり、預言とか、異言とか、知識というのは何かの手段なんです。何か目的を実現するための手段として、異言が与えられたり、預言が与えられたりする。知識とか、癒しの賜物とか、いろいろな賜物は何かの目的を達成するための手段として与えられているものです。だから、それに



あまり重きを置いてはいけません。愛は手段ではない。愛そのものが生命なんです。愛そのものが神さまの本質です。

10 完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。11 幼子おさなだったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見るようになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。

今は、神さまの方は私のことを知っていてくださっても、私の側からは神さまのことはあまりわからない。おぼろにしかわからない。しかし、その時には、顔と顔を合わせているようにすべてを知ることができる、ということが最後に言われています。その時には、今、神さまの方からは知っていてくださるように、こちら側からも神さまのことをはっきりと知ることになる。

13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」(コリント13・8～13)

信仰と希望と愛は永遠なものであって、その中で最も大いなるものは愛であると。

復活の体

その次の15章42～58節は、復活のことを言っています。我々は肉体の命をいただいた。しかし、その肉体の命をいただいたと同時に、霊の生命をその中にいただいた。肉体の生命は死んでいくけれども、その肉体の命と同時に蒔かれていく霊の生命は、肉体が滅びたのちに必ず芽を出して、永遠の生命となって輝いていく、ということをやっているところです。

「42 死者の復活もこれと同じです。蒔まかれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、

朽ちないものへと変貌していく。「復活」というのは「変貌」すると言っていたようによろしいでしょうね。

43 蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活(変貌)し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活(変貌)するのです。44 つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活(変貌)するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。45 「最初の人アダムは命のある生き物となった」と書いてありますが、最後のアダムは

これはキリストのこと。

命を与える霊となったのです。46 最初に霊の体があったではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。47 最初の人には土ででき、地に



属する者であり、第二の人は天に属する者です。⁴⁸土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。」(コリント15・42〜48)

「肉から生まれるものは肉であり、霊から生まれるものは霊である。人、新たに生まれずば神の国を見ることできない。神の国に入ることができない」

と言われた。それとこれは通じている。肉で生まれたものは、その肉のままであつたら、霊の次元と断絶がありますから。

「霊の次元、神さまの次元に生きるためには、肉の次元で生きている人間に霊の次元が与えられないといけない。それをいただいたならば、スツとそちらへ引き上げられていく。しかし、それを経験していなければ終わらだよ」

と。だから、絶対に我々は地上でこの命をいただいている間に、肉の命をいただいている間に、しっかりと霊の生命をいただかなければならない。

霊の生命をくださるのはイエス・キリストです。イエス・キリストを受けとった者も霊なる人なんです。だから、イエス・キリストが十字架の後にあの素晴らしい霊体となつて現れてくださった。そして、天に昇つて行かれたように、私たちもキリストと一つにされているならば、この肉の体が滅びたときには、ちゃんと霊の体が備えられて、そして、衣をいただいで天に昇つて行く。これは必然なんです。信じるの信じないと、そんなことではない。必然なんです。そういう世界に我々は導かれている。その必然をいただくのは、「唯一の真の神であるあなたと、あなたがお遣わしになったこのキリストと」

如にされる、一つにされるのが永遠の生命への道です」

ということになります。

天への土産

そういうことで、今からもう二千年近く前の古い話であり、そして聖書が書かれたのは、それから百年内外のことで新約聖書が書かれ、旧約聖書はもつと古い何百年も前の時代に編集されたという。そういう古い古い文献でありながら、中に書かれていることは実に永遠なる、時の流れによつても消えないものが書かれている。これはやはり神さまの霊に導かれて書かされたと思えない。昔は録音もできませんし、録音録画も何もない時代でしよ。それが弟子たちの心に焼きついていて。それが甦つてきて文書になったんですからね。これはやはり凄いことだと思います。

もしも昔の時代に今のようなITというような機器が発達していたら、すべてが録音録画でユーチューブで流されていつでも見られて、キリストが、「癒えよ！」と仰つたら、パースと元気になっていたり、ということが実現しているのかもしれない(笑)。



でも、我々はそういった現象面ではなくて、質的に滅びないもの、永遠に輝き続けるもの、それを我々はいただいている。この消えゆく儂い命はかなです、我々は。まあだいたい、百歳が平均値なのでしょう。百歳以上の人が三万人もいるというけれども。その三万人がピンピン元気でいてくれるのか、これはまた別問題です。やはり、地上に生きているあいだはピンピン元気でいたいものね、何か人さまのお役に立てるような在り方で。そしてやがてコロリと、ピンピンコロリで、向こうに迎えられるというライフでありたいと思いますが、そういうふうな生き方をするにはまず、

「信仰・希望・愛、これをいただいでいないと、なかなか行き先がお先真つ暗ですよ、

ひよつとしたら地獄かも知れませんよ」

なんて言われて、それだけで生き生き生きるのは無理ではないでしょうか。

私はやはり、行き先がもう決まっていますから、終活しゅうかつなんてしなくてもいいんですよ。

「行き先は、あなたのためにちゃんともう所を備えてある。みんな向こうで待っているからね。そのかわり、待っているから、来るときには宝物を携えて来なさいよ。いろんな人を救い上げました、いろんな人に愛を分かち与えましたという、そういうお土産を持って来ないと。手ぶらできたら承知せんよ」

と、向こうの人たちが言っている。

だから、皆さんも手ぶらで行くことはだめですよ、やはり手土産を持っていかないと。土産とは、いろんな魂がキリストのものとしてされていくということ。それを手土産として持つていく。

「ああ、よくやったね」

「はい。でも、私の力ではありません。主さま、あなたが一緒に働いてくださった

からです」

なんて言って、栄光をキリストに帰する。かつこいいではありませんか（笑）。

歳としをとるといふことは決して悲しいことではない。確かにやはり肉体は衰えます。私も、若いときは元気だったなと思うんですよ。今はもう腰は曲がるしね、「先生、腰が曲がっています。背中まるいよ」なんて言われる。でも、気持ちは、もう永遠の生命をいただいでいますから、気持ちは天に羽ばたいておりますから、決して皆さまには負けないつもりですので。

まあそんなことで、皆さんも元気よく生き生きと生きていただいで、そしてまた、本当にその生命を多くの人に分かち与えていく。生命を分かち与えることは、生命をいただいでいる者にしかできない話です。自分がそれをいただいでいる者にしか、分かち与えることができない。それを皆さんはいただいでおられるのですから、それをどうぞ多くの人に分かち与えて、みんなでそれこそ羽ばたいて一緒に天に昇っていけるような、そんな人生でありたいですね。



それでは、これで終わることにいたします。

祈り

最後にひとことお祈りいたします。

主イエス・キリストさま。処々方々からこの集いにお招きくださって、ありがとうございます。います。あなたは私たちに永遠の生命を、この肉体がどうなりましようとも、たとえ肉体が瞬時に壊こわされましようとも、死んでも死なない永遠に輝く素晴らしい生命をもたらしてくださいました。あなたをいただいた者はもう死にません。主さま、この地上の命が終わる時には、光輝いて天上に飛ばたいて行きます。どうぞ、地上にある間、本当にあなたが父の御意みこころを貫かれたように、今度は私たちがあなたの御意を、あなたのこのころをわがころとして、この世に現していくことができますように。私たちの日々なす営みがすべて、あなたの御意に叶うような在り方をどうぞ貫かせてください。

主さま、

「神の業わざとは、神の遣わし給うた方を信ずる、これである」

と。本当にあなたはあなたご自身を私たちにくださいました。そして、私たちと一つとなつて、あなたの御意をこの地上になさうとしてくださっています。私たちは自分のガンバリズムを捨てきつて、本当にあなたご自身に委ねきつて、あなたの導きに委ねて、私たちは常に、安らかにそして健やかに、嬉々としてこの地上の人生を歩んで行くことができますように。そして、すべてのことを、

「あなたの御名に栄光あれ、あなたの御意が貫かれますように」

と、その思いのみで我々を生かしてくださるようにながらうに奉ります。

このような素晴らしい世界を知らない方がいっぱいおります。ここに集われたお一人お一人が本当に自分たちのいただいたものを無限無量に分かち与えていくことができるように、どうぞ、お用いください、お導きください。また、九州の方で非常な災害に遭われた方々の魂を、あなたが護り導いてください。それに関わりのあるご親族の方とかいろいろな方々がいらつしやいますが、どうぞ、その人たちを慰め力づけ、本当の生き方を、この機会にいただいで行かれますように、お助けください。主イエス・キリストさま、すべてをあなたの御手にお委ねいたします。

この感謝と讃美と祈りを主キリストの尊みなき御名をとおして御前みまえにお献たまげいたします。アーメン。

